

平成三十一年 初芝居総見

一 歌舞伎座、新橋演舞場、国立劇場、浅草公会堂そして三越劇場（新派）と東京は五座で初芝居。いずれも大入り満員。結構な御時世です。久しぶり「新春浅草歌舞伎」を選んで正解でした。若手の澁刺たる成長ぶりは末頼もしく皆様満足されたことと存じます。

忠彦さんの句にありますように、座長の松也が仁左衛門の出世芸「義賢最期」に挑戦。観客は彼の気迫に圧倒され。終幕の巳之助の芋掘り踊りにほっとしておられました。

幕間は小生持参（墨谷さんから寄贈）の「琵琶湖の生酒」（滋賀県）と干し芋（茨城県）、深田夫人の南信州の名水仕込辛口を賞味・はねてから河東節仲間の飯田屋で名古屋の山田けい子さんと合流したんですが満員。時間がかかる為、ご主人から「薬研堀七味」を土産に全員が貰い。同じお仲間の尾張屋でたっぷり飲み食いしました。

二 初句会

川口選者ら7名出席。投句9名。

天牛さん寄贈の美々卯の凍結酒「福寿」、一灯さんの大吟醸「神の井・寒九の酒」（名古屋）、小生の純吟「越乃寒梅・別撰」とおかきを賞味し乍ら開会。猛さんの司会で順調に進行し御覧のよう

に孤舟選者、ゆたかさん、一灯さんが好成績でした。回覧は、

(一) 盛雄さんの処女句集「帰り道」(二) 「帰り道」より孤舟選者の選24句

(三) きさらぎ句会初句会成績表 (四) 伊丹市「公連協会だより」NO・73

(五) 「爽樹」1月号 (六) 「俳句」1月号：孤舟選者の初句会テーマについての一句と解説

三 関係者近詠

衣被いとこそそれぞれ国言葉

退きて念願のひげ力草

終に夫だけとの暮らし吾亦紅

傍線も書き込みも遺訓秋ともし

頼み合ひ一群低く鳥渡る

車椅子の小さく枯るる杣の道

風止まり刻の止まりて霧襖

松茸の山へと続く村の墓

風聞いて雨聞いて去る鷹の山

無卦に入り夜の長きこと長きこと

秋思落涙かかること嘗て知らざる

のぼる鮭難所に散るは是非もなし

十三夜手酌夢幻の独語症

赤い羽根胸にあ奴は虚言症

― 「森の座」 ― 1月号

なまはげの吠え星空を沸きたたす

― 「俳句」1月号

錆色に湖昏れてゆく寒の雨

初雪のあえかに濡らす石畳

真つ先に天守を照らす初明り

一舟を浮かべ春光溢れをり

酌み交す屋台の一会冬の月

投げ銭の帽子を覗く冬鴨

海峽の霧笛に応ふる遠霧笛

日向ぼこ菩薩のやうな母見舞ふ

縁を切る書かぬ勇気や年賀状

雪国から滲みし文字のある便り

眞希子

着膨れて行く当ても無き散歩かな

正明

全

店替えて短かく刈るや初床屋

全

全

板チョコをポキッと折るや春隣

全

全

●句集「帰り道」より孤舟選者24句選

弘子

菜の花や吾も蕪村の影を踏む

全

ひさかたに五感の揺るる春の雪

全

初蝶のそこはかとなき浮力かな

全

諍ひを遠くに見つめ冬菜摘む

全

常連の一人は見えずこぼれ萩

青史

シンフォニーの指揮者に見えぬ虫しぐれ

全

いくつかの失せし夢浮く柚子湯かな

全

風花や奥に魔物が潜みをり

全

不確かな愛もありけり木下闇

全

物の怪とひととき遊ぶ春の宵

全

修羅の身を闇に浸して薪能

襄

いくつかの隠し事なる花野かな

全

早苗饗や棚田に揃ふ膝小僧

允章

紫は大地の滴茄子の花

全

ままならぬこと野にもあり穴惑ひ

全

陽炎や時空を超えし無縁仏

全

山門の仁王はは美男よなほこり

全

満願の八十八番鳥帰る

一灯

海鳴りは彼の世の声か遍路宿

全

天滑る鳶の眼下に青蛙

全

噴水の天辺にある平和かな

昇

やはらかき雨音を聞く寝釈迦かな

全

生も死もままにはならず秋刀魚焼く

彦十

蕉翁の句碑寒からう初時雨

平成三十一年二月十六日

紀久男記